
Sunshine on my shoulders

クレーン ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sunshine on my shoulders

【著者名】

Nendoroid

【作者名】 クレーン ケン

【あらすじ】
ジョン・デンバーの「Sunshine on my shoulders」という曲から着想を得ました。

太陽はとても満足していました。

太陽はこの宇宙の中で明るく輝ける事を誇りにしていたのです。

太陽はエネルギーに満ちていました。

何億年も何億年も太陽は輝き続けました。

ある日、太陽はふと思いました、
「おや、考えてみれば、ずっとワシが輝いていたのでは、ワシの偉
大さが分からぬではないだろうか？　たまにはワシが見えぬ方が、
見えた時にワシの偉大さが分かるのではないか？」

そこで太陽は「夜」を作る事にしました。

太陽は星を引き寄せ、星達に太陽の周りを回るよう命じたのです。

星達は太陽の周りを周り始めました。

そうして星の表面に太陽に当たらない部分が「夜」になつたのです。

夜になると太陽が見えなくなりました。

そして昼になると太陽が輝くのです。

太陽は非常に満足しました。

それから何億年も経ちました。

ある日、太陽は考えた。

「昼も作った。夜も作った。しかしいつたい誰がワシの事を偉大だ
と思ってくれている?
誰も居ないではないか!」

太陽はそのように考え、悲しくなりました。

そこで太陽は自分の周りに回っている星のひとつに相談をしました。

「おー、そこには居る星よ。誰もワシの事を偉大だと思つておらぬの
だが」

「あら、それはそうですわ。あなたはとても大きなエネルギーが
あるのに、この宇宙に何も生み出していないではありませんか。た
だ単に明るいってのはあまりにも芸がありません」
とその惑星は答えた。

「そりか・・・・・。いつたいどうすれば良い?」

「あなたは自分の子どもを作る必要があるのでわーー私と結婚し
てくれ下さいまし。

そうじますと私は貴方の子を作れます。そしてその子が育つと貴方
の事を偉大な創造主として崇めるでしょー!」

そのようにして、太陽との惑星は結婚をしたのでした。

結婚指輪の代わりに、太陽は惑星に月をひとつプレゼントしました。

太陽はその惑星に子が生まれるように光と熱を送りました。

惑星も子づくりの準備の為、惑星の表面に海を作り太陽の光と熱がそこに当たるようにならました。

何万年も時が過ぎていきました。

そしてある日、ようやく惑星の海に最初の生き物が生まれたのです！

それはとてもとても小さな生き物でした。

しかし、太陽と惑星は喜びました。

なんせ、彼らの最初の子供だったのですから！

父は喜びその生物にふんだんの熱と明かりを与え、母は海にたくさん栄養を与えました。

生き物はまたたく間に増えていきました。

ある日、太陽は妻にいました。

「この子達のために、そなたはもっともっとと美しくなつて欲しい。そ

うするとの子達も喜ぶであつた
「ひらり

太陽は妻に春夏秋冬、四つの季節をプレゼントしたのでした。

何百万年も時が過ぎ、惑星には植物から大きな動物まで様々な生き物が暮らすようになりました。

太陽と惑星はその子達を愛した。

しかし、少々不満が無いではない。

生き物達はとても満足して生きていたのですが、
父と母である太陽と大地を認識していなかつたのです。

やはり実の親である以上、自分たちの事を子達に知つてほしかつた。

そこで、彼らは生き物達に不満を植え付けたのでした。

不満があれば少しは太陽と大地のありがたみを分かつてもらえると
考えたのです。

そしてその試みは成功しました。

中でも、大型の動物は不満が強くなり、腹を空かし、ようやく食べ物にありつけた時には空や大地に向つて何か言いたげにするようになつたのです！

太陽はある夕暮れ時、オオカミが自分に向つて吠えているの見て、
身も心も震えました。

ようやくワシの事を認識してもらえたのか！！

太陽は何十億年生きて、こんなに嬉しい事はありませんでした。

もつともつと我々の事を知つてほしい、いや愛してほしい、太陽と大地はそのように思いました。

それから何万年も経ち、奇妙な種族が現れました。

その種族は大きな頭を持ち、2本足で歩いていました。

そして、彼らは太陽と大地をキヨロキヨロと観察していました。

これは珍しい種族が現れたものだ、と太陽と大地は思いました。

太陽と大地は彼らも愛し、恵みを彼らにも与えました。

すると驚いた事に彼らは太陽と大地に「感謝」したのでした！！

この時ばかりは母なる大地もびっくりし、おかげで大地に地震が起きた程です。

かれらは太陽と大地に「名前」を付け、崇めたり祈つたりするようになりました。

今までそんな種族はいませんでした。

太陽と大地の事を「父」や「母」と呼ぶ者も居ました。

太陽と大地は嬉しくてしかたがありませんでした。

太陽と大地はその時、自分たちが何故宇宙に居るのがが分かりました。

そしてなんとかして、その種族にその事を伝えたいと思いました。
しかし、それを伝えるには何千年も待たなければいけなかつたのです。

種族はとても頭の良い生き物でした。

種族は便利な道具や機械を作り、自然を征服していきました。

彼らは人工的な太陽を作る事にも成功しました。

人工太陽のおかげで、もう夜も暗くありません。

誰も太陽と大地を「父」や「母」と呼ばなくなりました。

太陽と大地はとても悲しくなりました。

「なあ、おまえ、どうやら我が子達は反抗期に入つたらしいぞ。おまえも最近肌荒れがひどいなあ

「ええ。最近あの子達、大地や空気を平氣で汚すのよ。・・・でも私はそれでもあの子達を愛しています。それをなんとかして伝えたいのです」

そしてようやくその日が近づいてきました。

種族は大気圏を突破して、宇宙へと飛び出す乗り物を発明したのです。

宇宙飛行士は今か今かと離陸の時を待ち構えていました。

彼はもう何年もこの時を待ちわびてきました。

「あの声」を確かめる為に。

その宇宙飛行士は子供の時、空から声を聴いたのです。

その声は「話がしたい」と言いました。

少年は驚き、空を見上げましたが、そこには太陽しかありませんでした。

その事を両親や友達に話しても誰も信じません。

しかし彼は、あの空の彼方から誰かが自分に話しかけたのだと信じていました。

秒読みが始まりました。

宇宙飛行士はコックピットに座りながら、何故なのかロケットに積んでいる燃料の事を考えていました。

燃料は何で出来ている?

決まっている、化石燃料だ。

化石燃料は太古の生物が地中に埋まつて出来た物だ。

なんの為？

我々人類がそれを利用する為だ。

ロケットを打ち上げるには膨大な量の化石燃料が必要だ。

秒読みが終わり、ロケットは火を噴きながら宇宙へと舞い上がりました。

強い重力を感じながら宇宙飛行士は考え続けました。
何故なのかは自分でも分からなかつた。

そう、引力だ。 地球には引力があるから重力圏を抜ける為に膨大な
エネルギーが必要なのだ。

宇宙飛行士は何故だか引力そのものと対話しているような気になつ
てきました。

引力はどこから発している？

そう、この大地、地球だ。

引力とは我々人類に与えられた試練だ。

つまり、試練とは大地だ。

我々人類は大地から試練を受けている。

我々は地球から試練を受けている。

なんの為に？

宇宙飛行士は自分の頭が強い引力でおかしくなっているのではない
か、と思いました。

しかし宇宙飛行士の考えは止まりませんでした。

なんの為の試練だ？

その時宇宙飛行士の頭に「対話」という考えが浮かびました。

いつたい誰との対話だ？

母なる地球から離れていつたい誰と「対話」をするといつのだ？

そうか！！

その時、宇宙飛行士は気が付きました。

大地、地球とは「母」。

「母」は重力という試練を我々に科しながらも、何億年分もの恵み
(化石燃料)を我らに与えてくれた。

化石燃料となつたかつての古代生物達も我々人類を助けてくれてい
る！

私に對話をさせる為に。

それを私ははつきり感じる。

古代生物達よ、いつたい私達人類に何をやつてほしいのだ？

その時、重力圏から脱し、ロケットは漆黒の宇宙の中へと飛び込みました。

宇宙飛行士は重力が0になる瞬間、背中を誰かが優しく押すのを感じました。

後ろを振り返ると窓から青い地球が見えた。

宇宙飛行士は息を飲んでその地球を見た。

真っ黒い宇宙の中に静かに静かにその惑星は浮かんでいた。

しかし宇宙飛行士にとって、その惑星は「地球」と呼べる存在ではありませんでした。

それは「意味」そのものだったのです。

それは観察の対象でもなく、「美しい」や「青い」などとこう形容詞がどれも当てはまりませんでした。

それは「存在」そのものでした。

そしてその「存在」は宇宙飛行士に言葉にならない無言の言葉で語りかけました。

「 わあ、お父さん！」挨拶しなさい」

宇宙船の反対側を見ると、そこには「父」が居ました。

父は明るく堂々と光輝きながらそこに居た。

その瞬間、宇宙飛行士は理解しました。

どうして地上に生き物がつまれたのかを。

どうして人類が生まれたのかを。

父と母は子に愛されたかったのだ。

その子が「人類」だつたのだ！

宇宙飛行士は地球と太陽を見ながら、ただただ涙を流し続けました。

その感情はすぐに太陽と地球に伝わり、太陽と地球も涙を流した。

その感情はひとつに解け合って、ひとつのお父さんになりました。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7186m/>

Sunshine on my shoulders

2010年10月15日21時25分発行